

# なつかしむ日

橘 糸 重

此たび印東様が第二の御歌集をお出しになるにつきまして、古いおなじみの一人として、何か一言書くやうとの仰で御座います。

われらはや老いにけるらしかへりみてなつかしむ日の多くなりつつ

といふのは、第一の御歌集に片山様のおよせになりましたお歌で御座いますが、其後の私にもそのなつかしむ一日の思ひ出が御座います。

先年元日に大雪の降りました翌日、印東様の新むろびらきにおよびいただきましたが、やはり同じ第一の御歌集に小花様が、昔の昌綱君そのままなる第二の少年とおかきになりました弘玄様は、まうお立派な青年となられ、その日よく御両親をおたすけになり、何くれとおもてなし下さいました。木の香かをる美しいお家居にふさ

はしい御一家の方々、お客様の佐々木先生御夫妻、故大先生が昔、二人の子ふみよみゑかきいそしめると仰せられました事は、私もうかがつてをりますが、御兄弟がふかくひろくお家の風をお傳へになり、ますますおさかえになります事を、はるかな處でどのやうにかお喜になつていらせられる御ことかと、ひそかに思ひつつよき半日を過しました事で御座います。

さて此度の御歌集を「家」とお名づけのよしうけたまはりまして

けはし世に君なごやかに住みませば家の内外のいかにのどけき

珍らかに嬉しくもあるかまれにとひし君が家居のおちつきごころ

【入力者注】底本と行を合わせるために、フォントサイズを小さくした箇所があります。

初出・底本：「心の花」第三十九卷第一号

昭和十（1935）年一月一日発行

入力：小林 徹

公開：令和六（2024）年五月十九日

橘糸重【[散文作品集](#)】に戻る。